

北島敬三＋石内 都

「変化する写真」＋「ならわぬ写真」
12/5,12,19,26 1/9,16,23,30

○北島敬三(12月担当)「変化する写真」
19世紀に革新的なテクノロジーとして生まれた写真も、もはや、写真は誰にでもとれるし、何処にでもある最も一般的な視覚装置となっている。私自身の写真の仕事のスナッシュショットから肖像写真への変遷をお見せしながら、あえて自覚的に写真を撮ることの現在の可能性を探ります。

○石内 都(1月担当)「ならわぬ写真」
写真をならわぬだけできってしまったので、教えることが出来ない。勝手に撮ってプリントして自分で見てから人に見せる、その繰り返しです。教えない、ならわぬ、という関係の空間はどんなものでしょうか。

北島敬三 | 1954年長野県生まれ。1981年日本写真協会新人賞、1983年第8回木村伊兵衛賞受賞。主な写真集に『写真特急便[東京]』(1979-80年)、『A.D.1991』(1991年)、『PORTRAITS+PLACES』(2003年)など。

石内 都 | 1947年群馬県生まれ。1979年第4回木村伊兵衛写真賞受賞。2005年ベネチアビエンナーレ日本館代表。主な写真集に『絶唱・横須賀ストーリー』(1978年)、『1・9・4・7』(1990年)、『SCARS』(2005年)など。

桜井圭介

「馬車道ダンス教室」
12/13,20,27 1/10,17,24,31 2/7

ダンスとは何か、ダンスにおける身体とはいかなるものか、ダンスは何処にあるか、ダンスは如何にして生まれるか、ダメなダンス/いいダンスとは何か……。
街頭尾端ダンスについて考える。アタマとカラダで思考/試行する。そのことのために、ダンスを見たり作ったり、それ以外のことをしたりする。そういう2ヶ月間。毎回動きやすい服装と書きやすい筆記具そして好きな音楽を持参のこと。

桜井圭介 | コンポーザー。『西麻布ダンス教室』などの著述活動以外に、「ダンスを再発見するレクチャー」、「ダンスを発明するワークショップ」、「吾妻橋ダンスクロッシング」などダンス公演のプロデュース、ダンス・コンペの選考・審査、音楽家として振付家とのコラボレーション等々あの手この手でダンスに对する「オルタナティブ」なアプローチを模索している。

Monday

19:30
21:30

Tuesday

19:30
21:30

暮沢剛巳

「ミュージアムの現在」
2/6,13,20,27 3/6,13,20,27

近年、日本はミュージアムの建設ラッシュに沸いていて、独自の特色を備えた新しいタイプのミュージアムが各地で開館しています。その一方で、既存のミュージアムを取り巻く状況には厳しいものがあり、独立行政法人や指定管理者制度などの問題が浮上、経営という観点から語られることも多くなりました。この講座では、多くの事例を取り上げ、随時受講者の意見も聞きながら、「ミュージアムの現在」を考えて行こうと思います。

暮沢剛巳 | 1966年生まれ。美術評論家。武蔵野美術大学、女子美術大学短期大学部、桑沢デザイン研究所非常勤講師。著書に『美術館はどこへ』、『風景』という虚構』、『現代美術を知るクリティカルワーズ』(編著)、『アートスケープ・クロニクル』(監修)、訳書にスパーク『ジェンダーのデザイン史』(共訳)など。2004〜05年にかけて、『BT/美術手帖』誌上で「ミュージアムX」を連載するなど、ミュージアムに強い関心を持ち、リサーチを行っている。

加藤種男

「加藤種男の遊庭 (あしびなあ)−歌と酒から宗教まで」
2/7,14,21,28 3/7,14,28 (＋特別レクチャー)

近代西洋の啓蒙主義を仮想的として、社会とアートの縁結びをテーマに掲げて八面六臂の活躍をして来た企業メセナのエキスパートが語る社会ヴィジョンのすべて。そのアート三昧の生活から見えているものは何か。原理主義を批判する宗教観や、骨董から現代アートまで幅広い愛を、情熱と涙で語る。「迷惑でしょうが、俳諧師としての自作朗読から、歌あり、演奏ありのエピキュリアンぶりを発揮したいなあ」という。

加藤種男 | 1948年兵庫県生まれ。現在、財団法人横浜芸術文化振興財団専務理事・事務局長、財団法人アサヒビル芸術文化財団事務局長、社団法人企業メセナ協働会研究部座長、文化経済学会理事、日本NPO学会理事、日本NPOセンター評議員などを務める。1990年にアサヒビル企業文化部創設を機に入社し、以後同社社会貢献部門の推進役となる。著書に『社会とアートのえんむすび〜一つなぎ手たちの実践』(共著)など。現在、横浜市都心部歴史的建築物の文化・芸術活用実験事業推進委員会副委員長。

高見亮子＋明神 慈

「女性演出家による演劇ワークショップ」
12/7,14,21,28 1/4,11,18,25

○高見亮子(12月担当)「日常から舞台上へ、境界を越える身体づくり」
ダンサーでもスポーツ選手でも雑技団員でも無い身体をもってして「雄弁に語る身体」を舞台より驚い、という事実を検証しながら、身体表現の可能性を発見していきます。
○明神 慈(1月担当)「身体言語と深層言語をすすする使う」
ボカメソッドは円運動(ハの字・螺旋)を基軸としています。子供の頃、毛穴全体から声が出せていた身体を取り戻してゆきます。余分な力が抜けた身体で自分の軸を発見・運転し、奥底から溢れる深い声を響かせてゆきます。

高見亮子 | 劇作家・演出家。演劇作品と「生活ダンス」作品を二本柱に創作活動を続ける「かもねざシヨット」を主宰。日常に潜むドラマに独自の焦点を当て、放任した笑いを転がす。観客層は老若男女幅広い。

明神 慈 | 「ポカパン記憶倉」倉長・劇作家・演出家。「地上3cmに浮かぶ楽園」を標に、現実の皮膜が融解してゆく瞑想的空間を国内外で体現中。体内浮遊力を育てるボカメソッドを基としたワークショップも国内外で行っている。

Wednesday

19:30
21:30

あがた森魚

「少年自身 少女自身」
2/1,8,15 3/1,8,15,22,29

自分自身が何を表現できるかを、照らしあわせて遊ぶ場所、それがこの教室です。今、表現しようとしているものは音楽でしょうか、映画でしょうか、映像でしょうか、絵画でしょうか、文学でしょうか、それとも舞踏でしょうか。自分で持ちうる自己表現、それは肉声であれ、身体であれ、カメラであれ、キャンパスであれ、原稿用紙であれ、それを携えて行ってきてください。自分という少年性、自分という少女性を表現しつつ、それらを相互にクロスメディアしてみようという、そういう試みです。

あがた森魚 | 1972年『赤色エレジー』にてデビュー。20世紀の幻想的で架空感に満ちた作品世界を音楽、映画を中心に展開。映画監督作品に『僕は天使じゃないよ』、『オートバイ少女』、『港のロシキー』。函館港イルミナシオン映画祭のディレクターを務める。CDアルバム近作に『佐藤啓子先生はザンコク人ですすけど』(2001年)、『ギネオバルデ』(2004年)。ライブを全国各地で行い精力的に活躍中。

白井 剛

「からだ、で/を、聴く/呼ぶ。粒/波/穴のからだ」
12/1,8,22 1/5,12,19,26 2/2

「からだ、で/を、聴く/呼ぶ。粒/波/穴のからだ」
踊りを始めて早10年になりますが、その間に教わったもの、拝借したもの、読んだもの、我流なもの、未解決なもの、等々織り交ぜつつ、自分の身体に耳を澄ましたり、呼んでみたり、大声でさけんだり、知らんぷりしたりしながら、踊りが通る身体をスタンバイ。準備が出来たらその先へ滑り出してみます。「光」は波でもあり粒子でもあるそうですが、ダンスや身体もそんな気がします。それから、空間に人の形の「穴」のようなそんな立ち方、存在感を音イメージしました。

白井 剛 | 1996年〜2000年、「伊藤キム十輝く未来」にダンサーとして参加。1996年、「Study of Live works 発条た(ばねと)」を結成。2000年、パニョレ国振付賞(現ドゥ・セヌ・サン・ドニ)及び、横浜プラットフォームナショナル協議員賞を受賞。ソロ・振付・WSの他、伊藤キム、Yu-Ring振付作品等に出演。 http://baneto.topolog.jp/

Thursday

19:30
21:30

町口 寛

「南青山大サーカス。」
2/9,16,23 3/2,9,16,23,30

仕事だなんて考えると万事ややつこしいが、人間と人間の出逢いだと思えば、しかめっ面で座ってなんかいられるものか。そのアートディレクターの動きは、サーカスだ。制約という名の火の輪をかくくぐり、空中ブランコでアイデア三回転びねりを決めたくと思えば、過密スケジュールで膨れ上がった大玉を乗りこなし、都市に棲む猛獣たちさえ畏敬を持って餌いならず。緊張を一瞬にして喝采へと変換し、テントの重力を自在に変える ENTERTAINER だ。一つの演目の花形として固定されるようなアートディレクターは柄じゃない。ジャンルに呪縛される者に制作物を運動させることなど、どうしてできよう。ふいにテントに静敵。覗いてみると「骨折しちゃったよ〜」と笑っていた。ACROBAT はこれからだ。
以上、友人のコピーライターが書いてくれた僕の紹介文です。いままでの(僕の)仕事をネタに、グラフィックデザインについて予習復習してみようと思っています。

町口 寛 | 1971年東京都生まれ。アートディレクター/グラフィックデザイナー。マッチアンドカンパニー主宰。写真家たちとの交流が深く、数多くの写真集をディレクションしている。また、映画・演劇のグラフィックデザイン、書籍の装幀など幅広く手掛ける。主な仕事に、佐内正史「生きている」、寺山修司「森山大道」あゝ、荒野」、山崎ナオコーラ「人のセックスを笑うな」、犬童一心監督「ジョゼと虎と魚たち」等。

「横浜を巡る建築家たち part2」
12/9,16,23,30 1/6,13,20,27

横浜には第一線で活躍する建築家の事務所が数多く存在する。また巨大な都市インフラを個人の建築家が担当したり、都市的なスケールのイベントを建築家がプロデュースする場合も多い。今回は昨年開講の「横浜をめぐる建築家たち」の続編として、2005年5月より始動した北仲 BRICK+WHITE に事務所を構える建築家たちを講師に、自身の活動の他、横浜で建築家として活動することについてお話しを伺います。

12/9 小泉雅生 (小泉アトリエ)

12/16 中村由美子 (Techno-design Inc.)

12/23 福井裕司 (東京芸術大学助手)

岸 健太 (岸建築計画室)

宮元三恵 (東京芸術大学博士課程)

12/30 みかんぐみ

1/6 北山 恒 (Architecture WORKSHOP)

1/13 城戸崎和佐 (城戸崎和佐建築設計事務所)

北嶋一浩 (C+A/Vパートナー)

1/20 西田 司

(On Design Partners)

1/27 佐々木龍郎

(佐々木設計事務所)



Friday

19:30
21:30

飯沢耕太郎

「ポートフォリオをつくる一私をひらく」
2/3,10,17,24 3/3,10,17,31

写真をもんなぶりにポートフォリオにまとめてプレゼンテーションするかは、いま写真家を志す人にとって、とても大事になってきていると思います。今回のレクチャーと講評では、毎回自由に作品を提出していただくことに加えて、「私をひらく」という共通テーマを設定します。単純なセルフポートレートではなく、写真を撮る「私」をさまざまな角度から批評的に考え直そうというものです。多くのチャレンジ精神あふれる受講生の参加を期待しています。

飯沢耕太郎 | 写真評論家。1954年宮城県生まれ。1977年日本大学芸術学部写真学科卒業。1984年筑波大学大学院芸術学研究科博士課程修了。以後、フリーの写真評論家として活動する。主な著書に『芸術写真』とその時代』(筑摩書房)、『日本写真史を歩く』(新潮社)、『荒木!』(白水社)、『フォトグラフィーズ』(作品社)、『写真美術館へようこそ』(講談社)、『私写真論』(筑摩書房)、『危ない写真集246』(ステュディオ・パラポリカ)など。1990-94年、写真誌「d'jà-vu」編集長も務めた。



白井 剛



暮沢剛巳



加藤種男



町口 寛



高見亮子+明神 慈



飯沢耕太郎 撮影:Emi Anrajuji



飯沢耕太郎 撮影:Emi Anrajuji

Saturday

15:00
17:00

「美食同源」

2/24,25,26 3/4,5,11,12 (曜日が異なります)

「美食同源」は2006年2-3月に開催予定の「食と現代美術 part2」にあわせて開講。出品作家とのワークショップや横浜の食文化のフィールドワーク等を通して食と美術の関わりを探っていく。

2/24(金) 岩淵潤子 (慶應義塾大学教授)
19:00-21:00 清水嘉弘 (株)東京文化村顧問
* 授業は1時間のみ・オープニングパーティー

2/25(土) 折元立身 (美術家)

2/26(日) 林 のりよ(子) (作家)

3/4(土) 森野あやこ (HANA-YA)

3/5(日) 坂口響 (MOO Chicken・オリジンフード研究会)

植木 豊 (子連れ自費出版人・美術ライター)

3/10(金) **19:30-21:00** 井上明彦

3/11(土) 芸術美酒プロジェクト (特 弘太(横浜ビール)(株)醸造長/精道夫/他)

3/12(日) CUEL (料理集団)



※この講座は「食と現代美術part2」展にあわせて開講します



伊勢丸 111
ISE MARU 111-111



伊勢丸 111
ISE MARU 111-111



伊勢丸 111
ISE MARU 111-111



伊勢丸 111
ISE MARU 111-111



津山丸 112-114
TSUYAMA MARU 112-114



津山丸 112-114
TSUYAMA MARU 112-114



津山丸 112-114
TSUYAMA MARU 112-114



津山丸 112-114
TSUYAMA MARU 112-114



高安丸 113-116
TAKAH MARU 113-116



高安丸 113-116
TAKAH MARU 113-116



高安丸 113-116
TAKAH MARU 113-116



高安丸 113-116
TAKAH MARU 113-116



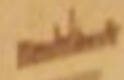
徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117



徳島丸 115-117
TOKUSHIMA MARU 115-117